

# 薬物動態に基づく高齢者患者の直接経口抗凝固薬適正使用に関する研究

申請者：山崎 美穂

## 【論文内容の要旨】

近年ワルファリンに替わって、弁膜症性心房細動患者の心原性脳梗塞予防に用いられるようになった直接経口抗凝固薬（DOACs）の問題点、すなわち、ワルファリンと異なり、DOACsの半減期の短さからPT-INRの測定が意味をなさず、適切な投与量をモニターする方法が確立されていない現状に焦点をあて、申請者が勤務する病院に通院するDOACs服用中の患者（高齢者）を抽出し、各患者の年齢、腎機能に照らし合わせたDOACs（ダビガトラン、アピキサバン、リバーロキサバン、エドキサバン）の服薬量の検証と、実際のDOACs血中濃度の測定、更には、梗塞・出血のエピソードの有無について検討したものである。その結果、以下のことを明らかにした。

DOACs4種で、適切な服薬量が投与されていない患者が散見されること、リバーロキサバンを服薬している患者では、血中濃度が適正濃度以下になっている患者が2名、適正濃度以上の患者が1名、これに対して、ダビガトラン、アピキサバン、エドキサバンでは、血中濃度が適正濃度以上になっている患者が多かったこと、更には、各DOACsで、その血中濃度が適正濃度以上になると腎機能低下との関係はないこと、を見出した。

## 【審査結果の要旨】

DOACsのモニタリング方法として、薬物の血中濃度を直接測定することの重要性を示唆するもので、服薬コンプライアンスも含めた適切・効果的な服薬と副作用の予防実現に大きく貢献すると思われる。また、本論文は、実際の医療現場で、薬剤師がどこまで患者の健康維持に寄与できるのかをストレートに問うた挑戦的な試みであり、一薬剤師としてできることを実践した本研究は極めて価値あるものと考えられる。

論文発表会と面接試験でも、審査員の質問に対して自身の考えを明確に陳述し、また適切に説明を行った。こうしたことから、薬物動態に関する専門知識はもちろん、薬学全般の知識も深いレベルで習得していることが窺い知れた。以上を鑑み、博士（薬学）の学位を授与するのにふさわしい学力を十分に備えているものと判断した。

平成31年3月

（主査）水谷 顕洋

（副査）石井 功

（副査）渡邊 泰男